



「まゆだまのうた」に込めた祈り

「まゆだまのうた」という長沢勝俊作曲による純邦楽曲があるが、秋の気配が濃くなりつつあるとはいえ、まだまだ夏の暑さが残る先の土日、山梨県の河口湖湖畔にある某ホテルで開かれた「笛竹の集い」で披露された。「まゆだまのうた」の演奏は、心にしみわたり、深く静かな感動をおぼえた

▼まゆだまは地域によつて異なるがミズキや山桑等の枝に、花が咲いたように餅をたくさんつけたものだ。一月一五日の小正月に、その年の繭が豊かにできることを願つて床の間や柱に飾られる。このまゆだまの行事を寿ぐ心象風景を曲にしたのが「まゆだまのうた」である。演奏したのは、福島県南相馬市から参加された菅野啓明さん、幾代さんご夫妻。啓明さんが本来は尺八で吹くところを篠笛に置き換え、幾代さんがお箏で合奏

▼演奏に先立つて幾代さんから、三・一一以降、“普通のこと”の大半を失つてしまい、またできずにきたが、七年を経過してやつと落ち着きを取り戻しつつある中、“普通のこと”ができる素晴らしさをあらためて噛みしめている、との話があつた

▼今、南相馬市では除染がすすんで、農業の再興に取り組むことができるようになってきたそうで、村おこしの一つとして養蚕が注目され藍染の見直しの動きもあるとのこと。いろいろな動きが交錯する中、自然の下ですべてはつながっていることを実感しているとも幾代さんは述べる。お二人の「絹の賛歌であり、またそれをつくりだした人間の賛歌」でもある「まゆだまのうた」の演奏に、南相馬市そして福島の復興を心から願わずにはいられなかつた。

(土着菌)